

「正信偈」について（第四回）

正信偈の教え上 古田和弘、正信偈のこころ限りなきいのちの詩 戸次公正、等による

ふほう むりようむへんこう

普放無量無辺光

あまねく、無量・無辺光、

むげ むたいこうえんのう

無碍無对光炎王

無碍・無对・光炎王、

しょうじょうかんぎち え こう

清浄歡喜智慧光

清浄・歡喜・智慧光、

ふだん なんしむしょうこう

不断難思無稱光

不断・難思・無稱光、

ちようにちがっこうしょうじんせ

超日月光照塵刹

超日月光を放つて、塵刹を照ら

す

いっさいぐんじょうむこうしょう

一切群生蒙光照

一切の群生、光照を蒙る。

かぶ

〔意識〕

ひろく、はかり知れない光、かぎりない光、さえぎられることのない光、比べようのない光、炎のような光、清らかな光、喜びの光、智慧の光、途切れることのない光、考え難い光、説きつくせない光、日月を超えた光を放つて、数かぎりない国々を照らしておられる。一切の衆生はこの光の輝きを受けて照らされている。

「無量光」阿弥陀仏の智慧の光明は、量り知ることができないもので、限りある私たちの現実の有様は、全てこの光の輝きを蒙こうむっている。

「無辺光」私たちを悩み苦しみから解き放つ光明のはたらきには辺際へんざいがなく、ここから先は届かないというようきわな際はない。

「無碍光」何ものにも、さえぎられることが無い弥陀の光明は、障害

と思われどのようなものであっても何の障害にもならない光です。「無対光」対比するものがない光ということで、阿弥陀仏は他の何ものとも比較のしようがない、勝れた智慧の徳をそなえておられる。

「光炎王」「炎」は、私たちの愚かさから起こる様々な迷いを焼き尽くすことをたとえたもので、私たちの迷いの暗闇を打開いて下さる光。「清浄光」貪りに支配される私どもの心の汚れに気付かせ、心が清らかになり、あらゆるこだわりから解き放たれるようにはたらく光。

「歡喜光」慈しみとしてはたらく弥陀の智慧の光は、怒りや憎しみの深い私どもの心を和らげてくださるので、心は喜びにあふれる光。

「智慧光」阿弥陀仏の智慧の輝きは、真実に暗く愚かで無知そのものの私どもに無知を知らせ、無知の闇を破ってくださいさる智慧の光です。

「不断光」常に輝いて一刻も途絶えることがなく、私どもを照らし続けてくださる阿弥陀仏の智慧の光明のことをいいます。

「難思光」我々の様な凡夫の思いによつては、到底量り知ることのできない、誰も思い量ることができない阿弥陀仏の智慧の輝き・光明。

「無称光」「称」は「はかる」という意味です。どのような方法によつても説明しきれない阿弥陀仏の智慧の輝きをいいます。

「超日月光」阿弥陀仏の智慧の光明は偏りが無く、しかも届かないところが無い、日月の光を超えた光にたとえられています。

阿弥陀仏の智慧には、塵のようにならばっているすべての世界を照らし出し、人々の迷妄を打ち破って、人々を輝かせる徳がそなわっている、そしてその輝きを蒙っていない者は一人もいないと親鸞聖人は言っておられるのです。それなのに私は、そのことに気付こうともしていない。自分の思いにのみこだわって、しかも私は自分の思いを正当化し、あえて智慧の光明に背を向けているわけです。そのような私のことを悲しく思っ、何とか私が目覚められるよう、親鸞聖人は、この偈によって教えてくださっているとと思われるのです。